



multiple - choice  
～多肢選択～



アルエ

## 箱入り娘の挑戦状

---

この世界には、ありえないほど大金持ちという人たちが存在する。  
そういう人たちにとってはお金なんて紙切れ同然なのかもしれない…………。

そう、この物語は金持ちに生まれた一人娘の挑戦のお話。

鉛筆からロケットまで何でも作っている大企業「江ノ原グループ」。  
国内ではその名前を知らない人はいない、というぐらい有名な企業だ。  
その企業をまとめている人物。  
それが江ノ原八雲（えのはら やくも）である。彼一人でここまで大きくしたのだ。  
部下からは慕われ、ライバル企業からは一目置かれているぐらいだ。  
彼自身、自分の手に負えないものは一つもないと思っていた。

彼の一人娘、「美幸」を除いては…………。

「ぎゃあ—————っ！！！！！！」

ドタドタ・ドタ…………グアッシャァァンっ！！  
朝からこの家はいつも騒々しい…………。その主な原因は美幸である。  
「何で起してくれなかったのよお！！いつもいやってほど早く起すくせにっ！！！！」  
文句を言いながら階段を下りてきた。  
降りたところに八雲の秘書である「筑波 燈次（つくば とうじ）」が手帳を右手に立っていた。  
「おはようございます。美幸さん、お父様がお呼びですよ」  
そうさわやかな笑顔とともに言った。  
はっきり言って、美幸にはそんな悠長に父親と話している時間はなかった。  
「はあ??時計!時計みなさいよ!!今からダッシュで行っても間に合わないんだって!!」  
「だったら、堂々と遅刻していけばいいじゃないですか…………?そうじゃありません?」  
満面の笑顔でそう言われては、断れなかった。  
なぜなら、彼の笑顔の裏は何を考えているのかまったくわからないからだ。  
ここで断ったなら、きっと彼は地味な嫌がらせをするだろう。  
そう考えた美幸は素直に従った。

「あーわかったわよ!父親の所にいけばいいんでしょ?」

「わかっていただければいいんです」

しづしづ父親がいる部屋の前に、美幸は立っていた。

扉を2回ノックすると、中から聞きなれた声が返ってきた。

「美幸か？入ってくれ」

ドアを開けるとそこにはなぜかハッピー姿の父親がいた。

「・・・・・・・・何それ？」

と、美幸が冷めた表情で言うと八雲はよくぞ聞いてくれましたという表情でこう答えた。

「おお！！これはだな、来月当社で発表するハッピーなんじゃよ。ハッピーを着てハッピーなんて」

一気に部屋を寒い空気が包んだ。

「わかったから、んで話ってなんなのよ。学校あるんだから、早くしてよね」

そう美幸が言うと、彼は急に真面目な顔をしてイスに腰掛けた。

「ああ、そうだったな。美幸、お前は大学進学と同時に家を出たいと言っているそうじゃな」

「うん。だって私は自分の道を進みたいもん、ずっと箱に入ったままなんて嫌！！」

「そこでだ。すんなり私が認めるとはお前も思っていないだろう？」

「そおね。思っていないよ。んでどうしようっていうの？」

「一つ提案がある。お前は友達に江ノ原グループの一人娘ということを誰にも話していないそうだな」

「そうだけど・・・・・・・・それがなに？」

『残り1年の高校生活、「江ノ原グループ」の一人娘』という事がバレずにすごせたらそれを認めよう』

「はあっ？？そんなんでいいの？楽勝じゃん！！」

「この勝負、受けるんだな。美幸」

「もちろん！！それで家を出るのを許してくれるのなら！！喜んで受けるわよ」

「よし、その言葉に二言はないな」

美幸は上機嫌で学校に向かった。彼女にしてみれば思っても無いチャンスだったからだ。

でも彼女は、なにか裏があるのでは？と心のどこかで疑ってはいるものの今はそれどころじゃないとスキップで学校へと向かった。

「おっつはよおお！！」

2時間目が終わった頃、美幸は学校に到着した。みんながどうしたの？と聞く。

彼女は、ちょっと朝起きれなくてといたって普通の遅刻の理由を述べた。

友達の一部である「三浦麻里」が話し掛けた。

「珍しいよね。美幸が遅刻だなんて！！」

ま、うちのクラスの月瀬（つきのせ）みたいになっちゃったかと思ったよ」  
「あんなヤツと一緒にしないでよ！！万年遅刻、欠席男とさあ」  
彼女のクラスにいる「月瀬晶（つきのせあきら）」は、学校に来る時は必ず遅刻、  
そして大抵は欠席という男だ。でも、テストでは常に上位。  
ウワサによると彼のIQは200近いという。  
容姿は眼鏡をかけていて常に本を持ち歩いているといった見た目にも秀才ぶりをみせている。  
そんなもんだから誰にも相手にされず、学校にきても自分の席で本を読んでは  
暇を潰しているといった感じだ。

ルンルン気分です授業も終わり、帰り支度をしていた美幸に麻里が、  
「ねー美幸、今からカラオケにいかない？」  
と誘ってきた。しかし、今日は今日だけはどうしても譲れない約束があったので断った。  
家路を急ぐ美幸。  
一体何があるのかというと、先ほど父親と交わした約束の続きで今日の倉嶺コーポレーションの  
パーティーにだけは出席すること、といわれていたからだ。  
行きたくはなかったけれど、そんなところに知り合いがいるとは思えないしとあっさりOK。  
家に帰り、ドレスに着替えて会場であるホテルに向かった。

すでにパーティーは始まっていて、大勢の人で盛り上がっていた。  
美幸の隣には秘書の筑波がいてあまり派手な行動はとれなかったが、それなりに楽しんでた。  
大勢が部屋のなかにうごめいているので、部屋の中は乾燥しきっていた。  
喉が渴いた美幸は飲み物を運んでいるボーイを見つけ賞おうとした。  
「すみません、飲み物……あっ？……あ——————っ！！！！」  
そのボーイを指差し大声を出した。ボ  
ーイもその大声にビックリしたのか、声を出せずにいたが彼女の顔をしっかりと見て言葉を発した。  
「……え？あ、あんたクラスの……えっと……九条だっけ？」  
『九条』とは美幸の偽名。そして、目の前にいるのはあの万年遅刻欠席男の月瀬だった。  
二人共にどうしてここに？……とお互いに思いながらも聞けずにただ突っ立っていた。  
そこに、あいさつ回りを終えた美幸の父親である八雲が美幸に気づき近づいてきた。  
「おお……やっぱり美幸か、いつこっちにきたんだ？」  
突然の父親の出現に美幸は咄嗟に、八雲に向かってこう言った。  
「お父さん！！！！……あっ！！！！しまった」  
その言葉を彼、月瀬は聞き逃さなかった。  
「え？江ノ原グループの社長さんですよ？それが九条のお父さん？どうなってるんだ？」  
彼の頭の中もパニックだが、美幸の頭の中は爆発しそうになっていた。  
今さっきこの、父親と交わした約束がすでに破られようとしていたからだ。  
美幸は咄嗟に言い訳を始めた。  
「あ、あ——えっと……こ、この人は、ね、私のそ、そのお……えっとお……」  
しかし、いい言い訳が見つからずふさぎ込んでしまった。  
見るに見かねた八雲がしょうがないなと言う顔で助け船を出した。

月瀬の前に立ち、こう言った。

「ちょっと、うちの娘の為に顔と身体を貸してくれるかな？なあ、月瀬くん？とやら」

その言い方は、まるで疑っているような初対面とはとれない言い方だった。

彼もその言い回しに気づいたのか、一呼吸をおいて返事をした。

「わかりました。あなたの頼みでは断ることはできませんね」

そう言うと、八雲、美幸、月瀬はパーティ会場を後にした。

秘書はどこいったんでしょうか？ま、あまり気にしないことですね。

## 絶対必要必須条件

---

一体、この父親は何を考えているのだろうか？格好からして意味不明だし……。  
大体よ！パーティーって言うてるんだらか、それなりの正装してこいって感じなのに。  
この親ってば何を思ったのか、戦国武将の格好してるし……。ありえない。

でも、月瀬もよく話を聞こうって気になったわよね。  
普通だったら、ウラがあるんじゃないか！って疑ってかかるのに。  
……。やっぱりわけわからない男だわ。

「月瀬くん、私と彼女の関係には勘付いているのだろうか？」  
「ええ……。なんとなく。親子、なんでしょ？お二人は」  
そりゃーあの場でお父さんなんて言ったら普通わかるでしょ？愛人に見えるかってんだ！！  
「今朝、娘とある約束を交わしたばかりだったのだ」  
「なんの約束ですか？」  
「卒業までの一年、私との関係を誰一人としてバレずに過ごせたら家を出ることを許そうというものだ」  
「なるほど。でも、オレにバレたからどうしよう？ってことですかね？」  
す、するどいなあ……。今朝約束したばかりなのに、もう無効だなんて言われたら私はグレルわよ？  
にしても、月瀬ったら顔色一つ変えないなんてね。  
……。ま、早い話無表情なんだけど。すると父親である八雲はある提案を月瀬に持ちかけた。

「お前さんが学校で美幸の監視役として働くというのはどうかね??」

それって私の事信用してないんじゃないの??  
「ちょ、ちょっとまってよ！！そんなに娘の言うことが信じられないの??？」  
「い、いやあ、美幸の事は信じてるけれどなあ～本来ならこの仕事は秘書の筑波にやらそうと……」  
えー！！それは勘弁！！だったら月瀬にしてもらった方がいい！！  
「秘書がやる予定を月瀬がやるのね……。私はそっちの方が都合がいいわ」  
「……。オレも別にかまわないですけど」  
それでも私はまだ納得いかないんですけどね。  
まあ、あの秘書に付きまといられるぐらいならマシかな？  
「他の詳しい規約は秘書である筑波から聞いておいてくれ、私はパーティーの会場に戻るよ」  
そう言って、父親は会場へ向かった。

「月瀬晶さん……。でしたっけ？こちらの書類に目を通しておいてください」  
「「うわっ！！！」」

二人して、突然現われた秘書こと筑波に驚いた。一体今までどこにいたんだろう???

「美幸さんも、目をとおしておいて下さい」

そう言われて渡された書類は、結構な枚数だった……いつ作ったのよ？コレ。

ん？私の家庭教師……しかも週3日??え?どうということよ???

「ちょ、ちょっと待って!!秘書!!これ、これどうということ??家庭教師って何??」

「秘書って……もうちょっとまじな呼び方があるでしょ？」

家庭教師に関しては社長からの案ですのですね」

なっ!!あのオヤジっ!!家の中でも監視させるのか??

「では月瀬くん、あちらの部屋でもう少し詳しい説明を……」

「わかりました」

そう言って二人はロビーの方に向かって行った。その場に取り残された私……。

にしても、月瀬ってなんであそこまで表情を変えないのかなあ？

無表情っていうか…能面みたいじゃん。

学校で話したことなんて一回もないし、実際顔を見たのなんてテスト前とテスト中ぐらいだもん。

でも……なんであの時、顔見ただけでわかったんだろう??

初めて学校で顔を合わせた時も、初めてって感じがしなかったんだよね……うーん。

どこかで会ったことあるのかなあ?だったら向こうも気づくよね??

軽い疑問を胸に抱きながら、残りの時間パーティーを楽しんだ。

家に帰り、部屋のベッドに寝転んで明日からの学校生活をどう過ごすか考えていた。

秘書はそれなりの緘口令をひいているとは思うけれど、意外に口が

軽いヤツだったらどうしよう?とか不安要素ばかり並べては、しかめっ面でうなっていた。

そのとき、私の携帯がけたたましく鳴り出した……ちなみに今の着信音は暴れん坊將軍ね。

画面を見ると、番号通知……うわっ、誰よ。

その電話は、ワン切りではなくてずっと鳴っていた。

番号登録し忘れた知り合いかな?と思い電話をとった。

「も、もしもし??どちら様??」

「あ、オレ。ていうか九条??」

どこかで聴いた声……ていうか私のことを九条と呼ぶ人間は学校の人しかありえない。

「……あ、月瀬??」

「そう。さっき筑波さんから九条の番号聞いた。お互いに知っていたほうがいいだろうって」

あの秘書。余計なことはベラベラとしゃべりおって!!!!

「わかった・・・登録しておく。メアドは？」

「オレの結構長いから、今度カテキョに行ったときに教えるよ」

「わかった」

「じゃー明日学校で・・・おやすみ」

「・・・おやすみなさい」

がちゃ。

なーにがっ！！おやすみなさいだああ！！！！

第一お前は明日学校に来る気があるのか？？って言う感じですよ。はあ・・・。

明日、学校行きたくないなあ・・・。

翌日。

そんな事も言われず、秘書のヘンな起され方で起きた。

「なー————！！つべたっ！！何、人のパジャマの中に氷いれてんのよ！」

彼は一向に起きそうにない私のパジャマの中に氷を投げ入れてきた・・・。

「美幸さんが起きないからでしょ？遅刻しますよ？」

はっ！と時計を見たら、遅刻ギリギリの時間。

急いで着替えて家を飛び出した。

何とか間に合って、席に着くと麻里が血相かえて近づいてきた。

「美幸！！ビックリだよ！！あの、月瀬がちゃんと一限からきてるの！

今日はヒョウでも降るかな？」

な、マジ？本気だったんかい・・・。

「へ、へえ————そう・・・ふーん・・・めずらしいこともあるもんね？」

にしても、私を監視するだけなのにヤケに熱心ではないですか？？

なーんか怪しい・・・。

昼休みに月瀬が教室を出て行くのを見て、急いで追いかけた。

どうやら屋上に行くみたいだった。彼が入っていったのを確認して、屋上へのドアを開けた。

そのドアの音で先に入った月瀬がこちらを見た。

「ん？九条・・・何かようか？」

普通に話し掛けてきた。とりあえず、この屋上には私と月瀬以外ダレもいない事を確認した。

「あんたさあ、なんでしっかり約束守っちゃってんの??」



思っていたことをストレートに聞いてみたら、手にもっていた紙パックのジュースを飲んでからこう言った。

「だって、給料もらってるし。悪いじゃん、タダ働きは」

へ？給料???

そんな金あるんなら、私の小遣いあげろおおおっつてんだあ！！！！！！

## メガネの下の素顔の正体

---

「はぁぁ??給料貰ってんの??・・・時給いくらなの?」

いや、聞くところ間違ってるのはわかってるけど気になるじゃない・・・そこはねえ。

「聞いたら驚くからやめとくよ。早く教室戻れよ?俺と一緒に帰ったら何言われるかわかんねえぞ?」

「あ・・・そうだね。じゃーまたあとで」

ガチャ。

給料を貰っている事に関しても驚いたけれど、彼がクラスの人から好かれては  
いないと言うことをあんなにもあっさりと言えるものなのかとそっちのほうに驚いてしまった。

授業も無事終って、早めに帰るつもりだった。

何故かという今日は、月瀬が家庭教師としてやってくるからと秘書にせかされていたのだった。

第一、秘書はなんだってああいう起こし方をするのだろうか?と朝あった出来事を思い出していた。

「あー遊びたいいい～本当だったらさあ～!

里胡達とカラオケ行くんだっなのにいい!!!あんのバカ秘書!!!」

そう言いながら、カバンをブンブン振り回していたらちょうど角のところで何かに当たった・・・。

ぼすっ。

「あ・・・す、すみません・・・大丈夫ですかぁ??」

恐る恐る、カバンを当ててしまった相手の方を見る。

よほど当たりどころが悪かったのか、痛そうにしていた。

「痛いじゃないですか・・・美幸さん・・・」

そういいながら、さわやかな笑顔に向けてきた・・・秘書だった。

「なんだ、秘書か。ほっといても平気よね?うん」

あっさり私は、彼のことは見放して歩き出した。その後をひどいなあといいながら着いてきた。

しかし、彼以外の足音が複数私達の後をつけていた。

「美幸さん・・・囲まれちゃいましたね?あははは」

笑顔で、この状況をどうやら乗り切ろうと思ったらしい。彼らの存在に気づいた時にはもう遅かった。

すでに四方八方を囲まれており、逃げ道がなかった。とことんついていない。

「どおーすんのよ!!!あんた秘書なんだから、なんとかしなさいよね??」

「な、秘書だからってなんでもできるわけじゃないんですから!!

美幸さんこそ、空手ならってたじゃないですか!」

「いつの話よ!!! 3歳じゃない、ソレ! すぐやめたし……」  
身内同士の痴話ゲンカが急に始まって、私達を取り囲んでいた奴らは  
啞然とした表情でこちらを見ていた。しかし、その中の一人が私達の会話を遮った。

「いい加減にしろ!! 俺達の要求さえ聞き入れれば何もしない」

「はぁ? なんで、見ず知らずの人の要求をのまなきゃいけないのよ! 急いでるんだから、そこどいて」  
そう言いながら、彼らの脇をすり抜けていこうと思ったら腕をつかまれた。

「痛っ!! 離してよ!!!」

ジタバタする私の両手を二人がかりで押さえ込む。その様子を黙って傍観している秘書……。  
コイツ……絶対、後で後悔させてやる!!!!

「ちょっと!! 秘書!! 助けなさいよ!! 何黙ってみてるのよ!!!」

そういいながら、さらに暴れていると秘書ははぁーと深いため息をついて私の方を見た。

「じゃー美幸さん。ボクのこと、今度から『秘書』って呼ぶのやめてもらえます? なんか、嫌なんですよね」

ヲイ。

「だぁ!!! わーったから!! 早くしてってばぁぁ!! 気持ち悪い、こいつら」

「はいはい、わかりましたよ」

しぶしぶといった顔で、彼は私の方に近づいてきた。

やっとやる気になったのかと、ほっと一安心していた時に私の頭上を何かが通過した。

ばこっ!!

鈍い音が聞こえて、右手をつかんでいた男が頭を押さえてしゃがみこんだ。  
何が起こったのか、誰一人として理解していなかったけれど、私の足元に  
転がっているものを見て、私は理解した。

『幾何学の公式と因数の関係』

うわぁ……難しそうな本のタイトルだなぁ……。

じゃなくて!! この本が投げられてきた方向を見ると、そこには月瀬が立っていた。

「九条、それ取ってくんない?」

サラリと彼は言った。そして私の方へと平然と近づいて来たのだった。

本を頭に受けた人物が、月瀬に殴りかかろうとしていた。

しかし、なんなくかわされてカバンによって飛ばされた。

「いたそぉ……」

小声で言うも、もう一人の男が背後から忍び寄って殴りかかろうとしたけれど回し蹴りをくらわされた。

「あちゃ……あ」

最初に吹っ飛ばされた人物が、道に落ちていた石を拾って月瀬に投げたかに見えた。

しかし、方向音痴だったらしくてその石は私をめぐって一直線。

確実によけきれない為、当たると思って目を閉じた瞬間。

私の目の前にいたのは月瀬だった。

カシャアアアア。

彼がかけていたメガネがアスファルトの地面に落ちた。

こめかみの辺からは血が少し流れていた。

「大丈夫か？」

と、その傷をなんとも思わないと言う感じに私に話し掛けてきた。

「・・・あんたこそ、血！！血！！出てるってば！！！」

「ああ・・・別に。輸血が必要なほどでもないだろ？」

とクスッと笑ってみせた。

メガネをしていない月瀬は、キレイな透き通った黒目をしていて何故か私はドキっとしてしまった。

その一部始終を秘書が見ていて、さささっと私のところによってきて耳打ちをしてきた。

「恋しちゃいましたかぁ？」

ブチ。

「だぁっ！！！！あんたはこれから先、一生『秘書』っ！！！！わかった？？？」

そういいながら秘書の胸元をつかみ、持ち上げた。

「はい・・・」

小さくしゅんとうなずいた。

その様子を一人、クスクスと笑っていた月瀬・・・その顔を見て、自分の顔が赤くなっているのに気づいた。

え??恋なの?これって!!!!!!

「お父さん、今回出番なかったよ・・・さみしいなあ～誰もいじってくれないんだもん・・・」

## カッパは冷たいのが好き？

---

なんとか無事にあの場を切り抜けて、家路を急ぐ3人。

「月瀬って何かやってたの？空手とか柔道とかあ・・・」

一番気になることを聞いてみた。だって普通の人には回し蹴りなんてできません・・・。

「あー小さい頃にな。今は何もやってねえよ・・・んだよ、その疑ってる目は・・・」

そりゃーそうでしょ？あの回し蹴りで何もやってないで済まされるかってんだ！！

そんな私達二人の会話を少し後ろから、なにやら見守っていますっていう視線で見つめている男が。

「秘書・・・あんたさっきからウザインですけど」

「あ、オレもそれは思ってた。なんでそんな後ろから見てんの？」

二人のきついツッコミに負けまいと、強気な答えを返してきた。

「美幸さん・・・ウザイはないでしょ？月瀬くんも・・・。

君達の後ろからまたヘンな奴らが来てないか見張ってるんです」

言い訳じゃん、それ。どうせ心の中では『美幸さんの恋路を邪魔しちゃいけませんから』と

思ってるんじゃないの？第一、私がこんな冷血な男を好きになるかってんだ！！！！

と思いながら、月瀬の顔を睨みつけた。その視線に気づいた本人がこっちを見たので視線をそらした。

あれ？そういえば・・・さっきから何かひっかかかると思ってたら・・・

「月瀬、メガネかけなくて大丈夫なの？見えてる??」

先ほどの連中のせいで、メガネを壊したのだった。

しかし、別に困る様子もなくてそのまま歩いていたらしい。

「・・・あー実はあのメガネ伊達なんだよ。実際の視力は2.0だしね」

伊達メガネ？なんで？だったらメガネする理由はなんなのよ？と思ったので聞いてみたら・・・

「特に理由はねえよ？なんとなく・・・だな。オレ、メガネ好きだから」

と笑顔で難なくかわされてしまっていた。もう少し深くつつこんでみたかったけれど・・・そこは自粛。

家のエントランスに着いて、秘書は父親の所で今日のことを報告してくると言って社長室に行こうとしたら・・・玄関の前に緑色の物体が仁王立ちで立っていた。

「何あれ・・・」

思わず私が口にする、その緑色の物体が動いた。思わずびっくりして3人は後ずさりをしてしまった。

よくよくみるとその緑色の物体はどうやらカッパらしかった・・・てか・・・アレって・・・。

「美幸~~~~！！遅かったじゃないかああああ！！お父さん待ちくたびれてしまったよお」

バカ父親。

頭にはちゃんとお皿を乗っけていた・・・ああ、恥ずかしいったらありやしないっ！！

両手を広げて私に抱きつこうとしていた。私まであと30cmってところで秘書につかまれていた。

「何やってんですか、社長・・・こんな姿、社員が見たら辞めますよ？」

「そうかなあ？経理のみんなはいいですね、と誉めてくれたぞ？」

いや、それはきっとお世辞だし・・・社長本人に向って『変人ですか？』なんて言える人はいないだろう。

そんなやりとりを見て月瀬は後ろを向いて口を抑え笑いを必死にこらえていた・・・。

「くっ・・・くっく・・・苦しっ・・・ぶはっ・・・」

押さえきれなくなったのか、おなかをかかえて笑い出した。その様子を見て父親はというと・・・

「ほら――！！月瀬くんはウケておるじゃないか！！そうだ、来月から『カップ月間』と称して・・・」

「やめてください。イヤですよ、社員全員がカップだなんて・・・ほら、仕事に戻って下さい！！」

「はぁ～い・・・美幸、しっかり勉強するんだぞ！！」

「はいはい」

やる気のない返事を聞いて、父親である八雲は秘書に引きずられて行ってしまった。

「今の出来事は忘れていいから・・・」

何よりも、この月瀬にあの父親の姿を見られたのが恥ずかしかった・・・。

「忘れる方が難しいよ・・・てか誰に話すってんだ？オレ、クラスに友達いねえし」

ごもつともです。その通りです・・・。って、自分で友達いないっていうのはかなり寂しくありませんか？

そんな会話をしつつも、彼の厳しい指摘は飛んできた。

「そんなことより、九条・・・そこ違う。なんで、その公式使うんだよ？」

「えっ！！これじゃないの??」

「さっき言ったこと聞いてたか？これで5回目だぞ??」

そう、こんなやり取りがさっきから5回繰り返されています。ありえない・・・。

どうやら私の頭は先ほどの父親の姿が脳裏に焼き付いていて数学の問題どころではないのだった。

あんなことがなくても、一番嫌いな教科である数学をすんなりと受け入れるはずはまったくなくて・・・。

問題と時間が過ぎていくのをただ待つだけだった。

「はぁぁ・・・やあ～っと終わったあ・・・」

「だな。オレの方が疲れたぞ・・・んで、わかったのかよ？」

私はてっきりもっと嫌味をいっぱい言って、自分は頭がいいんだぞーみたいな教え方かと思ってたら

そうじゃなくて、すごいわかりやすく驚いたんだ。普通の学校での月瀬からは想像できなかった

「あ、わかりやすかった・・・デス」

「それはよかった。そういえばさ、話は変わるけど九条の母親は？見たことないけど・・・」

急にお母さんのことを聞かれて驚いた。だって・・・

「お母さんはいないよ、私を産んですぐに死んじゃったらしいから・・・」

そうなのだ。

母親である人を私はこの目で見たことはなかった。

昔から体が弱くて、私を産むのでさえ大変だったと後から父親に聞いたのだ。

写真でしかみたことのない母親。そんなことを思い出していたからか、私の表情はどうやら曇っていった。

「そうか・・・兄弟はいないんだもんな。寂しくなかったのか？」

「えっ？そんなことを思ったことはない・・・かな」

彼のあまりにもやわらかい表情にとまどった自分がなんだか・・・。

「じゃ、じゃーさ・・・月瀬は兄弟いないの？」

とりあえず話をそらそうと、一生懸命だった。んで切り出した内容がコレ。ありきたりですか？

「オレ？あ————秘密」

なんだそれ！！！！秘密ってかわいく言えばいいってもんじゃないってば！！

「あ、っそ・・・」

なんだか拍子抜けしてしまった。家庭教師としての時間が終わったので月瀬は帰る準備をしていた。

「ふうーなんか疲れたな」

そう言いながら、玄関の方へと歩いていた月瀬。すると後ろからなにやらついてくる音がした。

振り返るとそこには・・・カップがいた。

「何やってるんですか・・・八雲さん。まだ着ていたんですか？」

すると、八雲は笑いながら彼に近づいていった。

「はっはっはー！！！！君も着たいんじゃないのかね？」

「いいえ」

「即答かい・・・じゃなくて、君に聞きたいことがあってね。時間を見計らってここにいたんだよ」

そういいながら、八雲は今ままでおちゃらけていた表情から豹変して、真面目な顔になっていた。

その変わり様に月瀬も、とまどっていた。

「な、なんですか？聞きたいことって・・・」

「君は何か隠し事をしてはいないかね？」

まあ、私は君の素性を知っているからこんなことをいえるんだが・・・」

そう言った八雲の言葉の意味はわからないが、月瀬には通じたらしくビックリした表情を浮かべていた。

そして一言『失礼します』とってその場を後にした。

「なんだってんだ・・・八雲ってやつ。気を引き締めないと、こっちがヤバイかも・・・」  
そう言いながら、帰り道を歩いていた月瀬。すると後ろから、突然呼び止められた。

「晶っ！！！！」

月瀬を下の名前で呼ぶ女性が彼の後ろに立って、手を振っていた。  
その女性の顔を見て、彼の今までこわばっていた表情が穏やかになっていった・・・。  
そしてこう言った。

「久しぶり・・・だな」

おまけ。  
カッパの衣装は、その後秘書が社長である八雲とのじゃんけんに負けて一週間着せられていたそう。



## 恋敵（とかいてライバルと読む）登場??

---

「久しぶりね、晶」

そう言いながら、親しげに話し掛ける女の人は月瀬に近づいていった。

「あはは・・・そうだな。しかし、なんでこんなところに??」

「偶然だわ。仕事の帰りだから」

そんな会話がこの場所では聞こえない。

でも、その女の人と月瀬が親しい関係だと言うことはこの距離からでも十分わかった・・・。

彼らがいる場所から10mほど離れた電柱の影に美幸は潜んでいた。

なぜこんな場所に隠れているのかというと・・・

月瀬が家に忘れていった、携帯電話を届けなきゃと思い家を飛び出したのが数分前。

きっとまだ家の近くを歩いているだろうと、走ってこの道を通ったら現場に出くわしたのである。

近づけないオーラを出している二人の間に、急に割り込むことはできずにかれこれ数分こういう状況で彼らを見ているのだった・・・。

あほだな、自分。

女の人の顔がよく見えないけれど、キレイな人だというのはわかった・・・。

「ねえ、いつ帰ってくるの?あの家に一人は広すぎるんだけど?」

「あーもう帰らないつもりだったんだけど・・・そう言ったら怒ると思って・・・」

そう月瀬が返事を返すと、女の人はほっぺたをつねった。

「いたひ・・・ひやめてくりえって・・・いたひっては」

しばらくして、手を離して女の人は携帯を取り出した。

「番号!教えてよ。変えたでしょ?また」

「ああ・・・毎晩うるさいからね・・・って、アレ??」

月瀬はカバンをガサゴソと探すも、見つからない携帯に気づいた・・・。

「番号言うから、ならしてくんない??カバンの奥底にあるらしい・・・ええーっと090の・・・」  
女の方は月瀬から言われた携帯の番号に電話をかけ始めた。

すると、カバンから離れた場所で着信音が流れてくるのが聞こえた・・・。  
二人で音のする方向へ顔を向けると、急になった携帯に驚いている美幸の姿があった・・・。

「九条?なんで?」

驚いた声で、美幸の名前を呼んだ月瀬。それに対する反応は

「はぁ～い???やっほー」

と妙に明るく返事をしている美幸・・・怪しすぎて、それ以上声をかけれずにいるようだった・・・。

「あ、こ、これねえ・・・家に忘れていったからさ、届けようと思って・・・」

素直にこの場にいたことを説明した。しかし、視線はどうしても女の方にいってしまう。

遠目から見ているときにはわからなかったけれど、キレイな人だった・・・。

背も高く、髪の毛もサラサラで・・・。

月瀬と並んでいると、なんだかお似合いのカップルという言葉がピッタリだった。

「おう・・・悪かったな」

そう、簡単にお礼を言って美幸の手から携帯を受け取った。

その様子を見ていた女の方が私に対して話し掛けてきた。

「あなたは、晶とどういう関係なの?」

「「はっ???」」

私と月瀬はほぼ同時に彼女への質問に疑問を投げかけた。

どういう関係って・・・説明しようがないじゃない。第一、あなたは誰ですか!!と聞きたい。

「え・・・ええ・・・と・・・クラスメイト???」

と困った顔で、必死に答えを考えている私に月瀬が助け舟を出してくれた。

「あークラスメイトでさ、家庭教師してんだ。んで、さっきまでコイツの家に行ったの」

「へーそっか・・・おこづかい稼ぎってやつね?」

どうやらそれで納得してくれたらしい・・・が!!私は納得していませんっ!!!

悔しいから、私も聞き返してみた。

「そちらこそ、月瀬とどういう関係なんですか?」

そう話題を持ちかけると、二人は顔を見合わせてしまってしばらく動きを止めてしまった。  
しばらくたって、彼女の方が口を開いた。  
その答えを聞いたとき、私は聞かなければよかったと後悔したのだった……。

「彼女よ」

語尾にハートマークでもつくんじゃないかと思う言い方だった。  
満面の笑顔でそう答えられたら、もう深く追求することなんて無理だった……。  
「そ、そうなんだあ!!! 知らなかった!!! あはは……じゃー私は帰るよ」  
平静を装うのが精一杯で、笑顔をキチンと作れていたのかが気になっていた。  
月瀬が「送っていこうか?」といってくれたけれど、うまく断った……。

その場を走って立ち去った……。

後姿はきつとみともない姿だったんだろう……。

「いいの? あれで……彼女、きつと誤解したわよ?」  
そう言いながら、月瀬の肩をポンと叩いた。  
「頃合を見計らって、話すさ……きつと長くは隠し通せないから」  
「そおね」  
会話を続けながら、月瀬とその女の人は暗闇へと消えていった……。

その日の夜中。

すっかり深い眠りについていた月瀬の携帯がけたたましく鳴り響いた。

着信先は『九条家』だった・・・眠い目をこすりながら、電話に出た。

「はい・・・こんな夜遅くなんですか??」

電話の相手は、秘書である筑波だった。

彼は焦っているようで、慌てて話を切り出した。

「深夜に申し訳ないと思っておりますが、ちょっと聞きたいことが・・・」

遠慮深げに話してくるその口調には、余裕がないように思えた。

話の続きを聞いて、それは確信にかわった。

「美幸さんが帰って来ていないんです。あなたに携帯を届けると家を出てからずっと・・・」

月瀬にはもちろん、心あたりがあった・・・。

あのまますんなり帰る様子ではなかったと・・・。

やはり自分が送るべきだったと、今更ながらに後悔をした。しかし、もう遅い。

「今から、そちらに行きます」

そう秘書に告げて電話を切った。急いで服を着替え、家を飛び出した。

そう、いつもならかけている伊達メガネもかけずに・・・。

## 探しモノは何ですか？

---

何でか涙が出てて、何でか走ってて・・・止められなくて・・・。

行き着いた先はなぜか学校だった。

「なんでここに来ちゃうかなあ？自分・・・・・・・・」

鼻声でひとり言を呟いてみる。周りには誰もいない・・・時計も忘れたから今、何時かわからない。

月瀬とあの女の人の関係はわかりきっていたことじゃない。

見ただけでわかるじゃない。でも、信じたくなかった。

そう思ったら、自然に涙があふれてて大変なことになっていた。

こんな顔で帰ったら、秘書や父親に何言われるかわかんないよ・・・。

でも、携帯忘れてきたのは失敗したな・・・せめて連絡いれないとマズイよなあ・・・。

血相変えて父親が探してそうだもん。

「美幸さんが行きそうな所にはすべて電話しましたが・・・」

「そうか、引き続き近所を搜索しておいてくれないか？」

「かしこまりました。警察のほうには？」

「いや、まだいいだろう」

そんな会話が、さっきからずっとこの部屋では行われていた。

オレが来た時点では、すべての可能性を試したあとだった。しかし、何人使用人がいるんだ？

「すみません・・・」

「いや、君の所為じゃないだろう??ん?月瀬くん、眼鏡はどうしたんだい？」

「あ・・・」

あまりにも急いで家を飛び出してきたので、眼鏡をかけてくるのを忘れていた。

そしてそのことにさえ、気づいていなかったのだ。

やばいな・・・そう思いつつも、今はそれどころじゃないと思った。

「・・・それよりも、九条が帰ってこないのはオレの所為だと思うんです・・・」

「どういうことかね？」

表情が変わった。きっと彼は、こっちが本性なのだろう。

時折見せる鋭い眼光は逸らすことができなかった。

「すべては言えません。でも、オレの所為なんです」

そういと、八雲は今まで座っていた椅子から立ち上がりオレの方へと近づいてきた。  
ものすごい形相で・・・ああ、殴られるなと思い目をつぶった瞬間・・・

ピコ。

ヘンな音がした。疑問に思って、目を開けると片手にピコピコハンマーを持って立っている八雲がいた。  
「な、なにしてるんですか??」  
「君が情けない顔をしているからだろ?自分の所為だと思うのなら、さっさと探しにきたまえ!」  
そう言われて、ドアの外へと投げだされた・・・。  
迷っているヒマはないと、九条家を後にした。

九条が行きそうな場所はすべてあたったと、秘書が言っていたからな・・・。

あとは、どこがあるのだろうか?公園?いや・・・学校か!!!

そう思い、急いで学校へと足を急がせた。

「は————くっしゅんっ!!!あーちくしょお・・・」  
おやじくさいくしゃみを我ながらしてしまったなと思いながら鼻をすすっていた。  
その途中にあった鏡を覗いたら、目が真っ赤な自分がいた・・・さすがにこれでは帰れない・・・。  
「学校で寝るかなあ・・・明日、休みだし・・・」  
そう思って、非常階段のトコに腰を降ろした。しかし、寒い・・・。  
すると、近くの道から人が歩いてくる音が聞こえてきた・・・警備員の人かなあ?と思って  
音のするほうへ、足を運んだら・・・そこにいたのは月瀬だった。

「え・・・な、んでいるの??」

それしか言えなかった。それ以上何か口にしたら、きっとまた泣いてしまいそうで・・・。

「こんのっアホ女っ!!!!」

「な・・・なんなのよ、突然!!!アホ女って何??」  
口では達者な言葉が出るけれど、体は正直で何でか涙があふれていた。  
「ふっ・・・あ・・・な、なんでえ・・・??涙がでるんだろおお・・・うっ・・・」  
自分でも何を言っているかわからなかった。

泣いている私を見て、月瀬が頭をかいているのが滲んで見えていた。

そして、次の瞬間月瀬が近づいて来て何故だか私は抱き締められていた。

暖かった。

そして、そう感じた次の瞬間。

突き飛ばした。

「いってえ！！！！何しやがるんだ！！あたたた・・・」

「あ、ごめん・・・つい・・・」

「『つい』で人を突き飛ばすなっ！！！！」

不思議と涙は止まっていたけれど、心臓は今にも飛び出しそうだった。

座り込んでいる月瀬を見ていたら、なんだかいてもたってもいられなくなってて・・・。

今度は自分から抱きついた。

「うおっ・・・な、なんだよ・・・さっきは突き飛ばしたくせに」

「ごめんなさい」

「ったく...今回だけだからな」

そう言ったのは聞こえたけれど、それから先のことは覚えていない。  
きつく抱き締め返してくれたのは・・・ぬくもりからわかった・・・。



## 謎の女は謎だらけ

---

月瀬に抱きついた日からすでに2ヶ月が経っていた。

それから別にお互いを意識するようになったとかはなくて、今までどおりの関係だった。

私は月瀬の『彼女』と言った人物のことを忘れようと必死だった。

そう、忘れかけていたはずなのに……。

「ねえー美幸は、冬休みどうすんの？」

そう友達の麻里が急に言い出した。そう言われると、冬休みはもう目の前に迫ってきていた。

「別に……特に用事はないけど？麻里は何かあるの？」

「えへへえ～彼氏とデェト三昧だよ！！いいだろー」

「あはは……そうですかぁ」

なんだかうらやましいんだか、なんだか訳がわからなかった。

そう言われると、冬休みはクリスマスとかお正月とかいろいろな行事がてんこもりだからねえ……。

恋人同士には欠かせない季節なんだろうね……私はそんなことしたことないっすよ。

そこでふと思い出す。月瀬の『彼女』といった人物を……。

きっと月瀬もあの人と一緒に過ごすのかなぁ……そうだよ。なにせ『彼女』ですから……。

授業も終って、学校から出ようとした時に正門近くで女の人が立っているのが目に入った。

忘れもしない、あの顔。

そう、月瀬の『彼女』だったのだ。どうやら誰かを待っているっぽくて、キョロキョロしていた。どうせ彼のことを待っているのだろうと思い、無視をして素通りしようとしたら・・・

「あ、晶のクラスメイトさん!!!」

と呼び止められた。てかその呼び方は恥ずかしい……。私以外に正門を通っている人もいなくて無視をすることが出来なくなってしまった。しょうがなく彼女の方へと顔を向けた。

「何か用ですか？」

「ええ。ちょっと顔貸してくれる？」

しっかりと腕をつかまれて、逃げられないようにされていた。そんなことしなくても逃げませんけど。

数分歩いて、学校の近くにある公園のベンチに二人して座った。

話を切り出したのは私の方からだった……。だって、着いてからこの人は全然しゃべろうともしないで携帯いじってるだけなんだもん。自分から人を捕まえておいてさあ……。

「あのお……話があるんですよね？なんですか？私も暇じゃないんですけど??」

「あ、ああ……そうだった。ちょっとあなたに忠告しておきたくて」

忠告??一体なんだろう？

今までひらいていた携帯をパタンと閉じて、その表情は急に真剣になっていた。

「晶にこれ以上近づかないでもらえるかしら？迷惑なのよね」

「な、何を急に……第一、彼からは一言も迷惑だなんて……」

彼に私が江ノ原グループの一人娘とばれてから、ずっと家庭教師などをしてもらっているけれど、一言も迷惑だなんて聞いたことはなかった……。だから、その言葉がグサリと胸に突き刺さった。

「あの子はそんなことをストレートにいえぬ子だもの。だから私から言ってあげてるの」

そう笑顔で言われた。そんなこと、わざわざ彼女の口から言わせなくても……自分の口から言えっ！なんだか無性に腹が立ってきていた。月瀬にもだけれど、この彼女にもだった。

「だったら!!本人から言うように言って下さい!!」

息を切らしながら彼女に向かって言うと、きょとんとした顔でこちらを見ていた。

そして、しばらくしてからクスクスと笑い出した。

一体何がおかしいというのだろうか？それを見てまた私は腹が立ってきて、何か言おうと思った時に後ろに人がいる気配を感じて振り返った。そこには話の中心人物である月瀬が立っていた。一体いつからそこにいたのだろうか・・・。

「・・・あんたもなかなか腹黒いやつだな」

「あらあ、晶ほどじゃないわよ」

そのやり取りの間に立たされている自分がなんだか惨めに思えた。しかし、次の一言で私の頭は再び真っ白になってしまったのだった・・・。

「いつこっちに帰ってきたんだよ、つい最近までロンドンにいたんじゃないの？姉さん」

「つい一週間前に帰ってきたのよ。連絡してなかったっけ??」

ちょっと待て・・・私の聞き間違いでなければ確かに今、月瀬は『姉さん』と言ったような・・・。

そんな言葉に困惑している私を尻目に二人の会話は続いていた。

その楽しそうな会話を遮るように私は、その言葉を確認するべく声を出した。

「ちょっと待って！！今、月瀬ってこの人に対して『姉さん』って言わなかった？」

「あ・・・バレちゃった」

「バレちゃったじゃねえよ！まだ話してなかったのかよ！ったく・・・そうだよ、コイツはオレの姉貴」

「えええええ！！！！！！！！！！」

彼の話によると、どうやらお姉さんが私を呼び出したのはこのことを打ち明けるためだったらしい。

2ヶ月前の出来事を話したら、言った方がいいねと二人で意見が一致した為だという。

だったら、はじめにそう言うことは言ってよね。

「それじゃー改めて自己紹介でもしようかな」

そう言うと、カバンを漁って名刺を取り出して私の前に差し出した。

「ごめんね、名乗るのが遅くなって。倉嶺桜（くらみね さくら）といます」

「あ、こちらこそ・・・えっと九条美幸といます」

お互いに初対面ではないのに、自己紹介をするというのはなんだか恥ずかしい感じがした。

にしても、お姉さんの名前がちょっとひっかかることが・・・。

「あれ？月瀬と名字違うってことは結婚されているんですか??」

そういと、月瀬とお姉さんは顔を見合わせてなんだかまずそうな顔をしていた・・・一体??

「あ、ああ・・・そのことね、そうなのよ。私結婚してるんだあ・・・ね、晶!!」

「お、おう・・・そうだよ」

お互いに顔を見合わせながら、苦しい笑顔で言葉を返しているのが丸わかりだった。

一体何だって言うのだろう・・・。

にしても、この『倉嶺』って言う名前・・・どこかで聞いたことあるんだけどなあ。

それが発覚するまで、そう時間はかからなかった。

## 嘘は嘘を呼び、真実を隠したがる

---

月瀬のお姉さんの名字「倉嶺」・・・どこかで聞いたことがあるんだよね。  
でも、それがどこで聞いたのかとかどういう人物だったのかなんて全然思い出せない。  
このままの状態、スッキリしないままというのはどうも嫌だ。

ということで、秘書である彼に聞くことにした。

「ねえー秘書、『倉嶺』って聞いたことある？」  
聞いた瞬間に秘書の顔が強張った。むしろ、聞いちゃいけないことを聞いたような衝動になった。  
「美幸さんっ！！何を今更言い出すんです！！『倉嶺』は「江ノ原」のライバル会社ですよ？」  
そうだった・・・父親である八雲とは敵同士だった。だから耳にしたことあるんだった。  
だからといって、月瀬のお姉さんがその『倉嶺』と関係しているなんてちょっと考えすぎかな？  
でも、そうそうある名字じゃない・・・よね？  
1人悶々とその事実と葛藤していると、さらに追い討ちをかけるように秘書である筑波が話だした。

「社長である『玲』には二人の子供がいるそうです。男の子と女の子だったかなあ？」

まじですか？益々つじつまが合うんですけど・・・。  
こうなったら、直接聞くしかない！と思ったけれどそんな勇気は私にはなかった・・・。  
「ね、秘書。その子供達の名前はわからないの？」  
遠まわしだけど、一番安全な方法だと思った。これでわからないといわれれば諦めよう。  
「え？ええ・・・確か・・・『晶』と『桜』ですね。そんなこと聞いてどうするんですか？」  
まずい。非常にまずい・・・つじつまどころか確信に近づいてきていた・・・。

彼に直接聞くしかないのかもしれない・・・。

しかし、冬休みということもあって家庭教師の時間もあまりなくて会う機会はなかった。  
会ったとしてもなかなかその話題を切り出せずに、いつも終わってしまう。

なぜ名字を偽っているのか？それを聞きたいだけなのに・・・。

私と同じ理由・・・んなわけないか。

結局聞き出すことは出来ずに冬休みはあっという間に終わってしまった。

私が卒業するまであとわずか・・・か。

このまま行くと、なんとかいけそうな気はしているけれど・・・。

冬休みが明けてから、妙に周りの視線が痛い気がしていた。なんでかなあ？と思ったけれど自分の気のせいだろうなと思っていた。

しかし、それは違っていた。

「美幸！！ちょ、ちょっと聞きたいっていうか確かめたいんだけどさ・・・」

親友の麻里が顔色を変えて、私のところへやってきた。

「ん？そんなに慌ててどうしたの？」

「最近さ、あんたのことですごい噂があるんだけど・・・本当なのかなあって」

噂？・・・そうかそれで！どうせ月瀬のこととかかなあ？と思っていた。

もしそうだとしたら、軽くあしらう気ではいたのだけど・・・。

噂というのは怖いものだと、これほどに感じたことはなかった。

「美幸が『江ノ原グループ』の一人娘っていう噂なんだけど・・・本当？」

卒業まであと2ヶ月なのに・・・一体、誰がこんな噂を・・・。

頭の中が真っ白になっていく中、一生懸命記憶を辿った。思い当たる人物はやっぱり1人だけ。

そう『月瀬晶』だけが、私の秘密を知っている唯一の人物。

そして、父親のライバル会社『倉嶺グループ』の長男・・・彼しか考えられなかった・・・。



## 噂というモノの恐ろしさ

---

月瀬がそんなことをバラすような人じゃないってわかってる…。

でも、現実が違うのかもしれない。信じたいけれど、信じる心を今は持ち合わせていない。

「麻里、そのウワサの元凶って誰かわかる？」

「私は隣のクラスの子から聞いたんだけど、その子は英語の授業中に先生が言ってみたいいな…」

英語の授業中にそんな話が出るなんておかしいよ。

隣のクラスはうちのクラスの英語担任が違うから…えーっと誰だっけ…？

「その英語の先生って…誰？」

「松葉先生だよ？」

松葉…あ、松葉孝志だ。

なんであの先生がそんなこと知っているのだろうか？

真相を確かめるべく、職員室へと足を向かわせた。

麻里には危ないからやめておいたほうがいいと言われたけれど、どこでそんなことを知ったのかが気になったから…。

階段を降りている途中の踊り場で月瀬に会った。

お互いがお互い目を合わせたけれど、会話はなくその場を私は通りすぎた…。

彼を今の状況では信じるできない。そんなことを聞くことが出来ない…。

ガラガラ…

「あ、月瀬。聞いたかよ？」

「何を？」

「うちのクラスの九条っているじゃん、あいつ江ノ原グループの娘だってウワサなんだぜ？」

「なっ…それで、アイツ…」

このウワサを信じるほど、生徒もバカじゃないと思う。しかし、事実は事実。

バレるのも時間の問題だと思う。しかし、一体誰が？

「松葉先生…お時間少しよろしいですか？」

少し声を震わせて先生を呼んだ。彼はわかりきったような表情で席を立ちこちらへと向かってきた。



ここではなんだからと、通された部屋は進路指導室だった。

「んで、なんのようかな？」

「とぼけないで下さい。ウワサの元凶だってことわかってるんですから」

そう言うと、彼は声をあげて笑いだした。まるで自分が悪いことをしたということをわかっていない。

そんな彼を見ていると苛立ちは募るばかりだった……。

「本当のことだろう？何を隠す必要があるんだい？」

「……そんなの…あなたには関係ないっ！！！！証拠があって言ってるの？」

「証拠？証拠ねえ……じゃあーコレは何かなあ？」

差し出された一枚の写真、それはいつぞやかのパーティーのものだった。

一体いつ撮られたのだろう？覚えがこれっぽちもない……。

「これでもウソと言い通すか？まー黙っててほしそうだからなあ…考えないこともないが」

そう顎をさすりながら、私の方へと近づいてきて耳打ちをした。

「これぐらいの金、オマエなら用意できるだろ？」

そういわれた金額は、とてもじゃないけれど私だけでは用意できる金額ではなかった。

だからといって、父親にすぎるなんてことはできない。

「そんな金額無理に決まってるじゃない！！！」

「ま、今すぐにとは言わないからさ。ゆっくり考えてみてよ……」

去り際に私の肩をポンと軽く叩いて、部屋を後にした。

何も反論が出来なかった自分が悔しい。

このままでは父親までも巻き込んでしまう……。

どうしよう……どうしたら……。

廊下を鼻歌交じりで歩いている松葉。

前方から男子生徒が近づいてくるのが、わかった。

その距離が数メートルというところで、松葉はニヤッと笑いこう言った。

「さっさと返事出してよね？ま、もう一つ金ヅルは見つけたんだけどさ」

## 話すことの出来ない出来事

---

松葉先生が言った言葉もそうだけど、父親との賭けが頭の中によぎった。  
これで、私の自由はなくなったってわけだ…。

ガチャ。

玄関の扉を開けるとそこにいたのは、父親である八雲と秘書だった。

「おお——美幸！久しぶりだなっ！！元気にしてたか？」

「…うん。おかえり、どこ行ってたんだっけ？」

「今回はガラパゴス諸島に行ってきたんだぞ？ん？何かあったのか？」

さすがに親である。ほんのわずかな変化も見逃さないらしい…ある意味怖い存在だ。

「あ、うん…あのさ、賭けのことなんだけど…バレちゃったから私の負けみたい」

笑顔で言うけれど、胸はいっぱいで今にも涙が出そうだ。

あんな理不尽なバレかたなんて…本当は認めたくない。

父親に言いたいけれど、そんなこといったらこの親は言われた金額をポンと出すに決まってる。

「そうか…」

たった一言そう言って、その場を去った。

その背中はどこか寂しそうだった。賭けに勝ったのは父親だと言うのに…。

その場には私と秘書の二人が残っていた。会話は何もせずに、秘書は軽く頭を下げて社長である人物を追いかけた。

「ごめん…理由は言えなくて…」

「んで、答えは出たのか？ん？」

廊下ですれ違った生徒に対して、松葉先生は話し掛けた。

「てめえにやる金なんてねえよ…の前に聞きたいことがあるんだけど」

そう言い、彼に近づく生徒。その表情は怒りに満ちていた。

それとは正反対な表情の松葉先生…近づいてくる彼の視線から視線をそらせずにいた。

「もう一つの金ヅルってえのは…九条のことか？」

「ああ。彼女、江ノ原グループのお嬢様だったんだ。君以上の金ヅルだよ…ふふっ」

そう言った彼の首元をつかみ持ち上げた。

「いい加減にしろ！！人を脅して、金巻き上げて何が楽しいんだ！！！」

「君にはわからないだろうね？ありあまっている金がたくさんあるんだから」

こんな状況になっても、松葉先生は一向に怯む様子は見えない。

何をいっても無駄かと思い、生徒は手を離れた…。

「月瀬…オマエはどうするんだ？」

「バラしてくれてかまわない…金で自分の命乞いをするなんてごめんだからな」

あまりに突然のことで頭がおかしくなりそうだった。

なぜ、オレのことまでバレたのかということ…九条の写真をチラッと見たけれど

あれは去年のヤツだな…もしかしたら、オレもあの場所にいたのかもしれない。

眼鏡なしで登校したのがまずかったのか？それでヤツにバレたのか？

だとしたら…自業自得だ…。

そんなことを考えていたら、なぜか目の前には九条こと江ノ原グループのビルの前にいた。

「なんで…今更、九条に会ってなにを言えばいいってんだ？」

ビルのてっぺんを見上げながら、その場に立ち尽くしていた…。

すると、玄関から人が数人出てくるのが目にはいった。その中心にいる人物をみて驚いた。

「あれ？月瀬くんじゃぁん～久しぶりだね」

「…相変わらずなテンションですね…八雲さん」

彼が今から出かけるところだったのは、見たらわかるけれどなぜか車に乗せられた理由はわからない。

「どこ連れてかれるんですか？」

「んーおうちまで送ってあげようと思って…ね」

「やはり、わかってたんですか？オレの正体」

「うん。初めて見た時からね…倉嶺グループの長男の晶くんだよな？」

「ええ…やっぱり八雲さんにはかないませんよ」

なんだか今までの空気が晴れていくのを感じた。自分の正体を隠すというのはコレほどまでに

つらいことなんだなと自覚した。ふと、八雲が何かを思い出したかのように月瀬に話かけた。

「そういえば…美幸がな、急に『賭けは私の負け』だと言い出したのだが、何か知ってるかな？」

その話を聞いて、アイツが何を考えているのかがなんとなくだけれどわかったような気がした。

すべてを八雲さんに話した。その表情はなるほどという風に受け取れた。

すると彼は急に携帯を取り出し、電話をかけはじめた。どこにかけているのだろうか？

すぐにその用件は終わった。なにかを計画しているかのような内容…。

なんだかんだ言っているうちに、自分の家の前についた。

「すみません、送ってもらって…」

「なあに。かまわんよーあ、明後日は卒業式なんだよね？」

「え？ええ…そうですけど？」

「んふふふ。楽しみにしてるよん」

そう言って、彼はその場を去っていった。

その言葉の意味を知ることになるのは卒業式当日だった…。

# 別れは言わないと決めた

---

何も解決しないまま、卒業式当日を迎えた。

なんだろう？気持ちはうれしいような哀しいような…複雑な気分だった。

「卒業生代表～・・・」

着々と式は進んでいく、友達は涙を流していたりしていたが私は泣けずにいた。

いっそこで泣いてしまえたら楽なんだろうなとは思った。

ふと、視界に月瀬が入った。真剣な表情で前を見据えている。

結局彼とは何も話せずにはいた…。

疑ってしまったことや、なぜ偽名を使っているということ聞きたいことはいろいろあったのに。

「それではここで来賓の方の紹介を…」

と司会者が喋りかけたときだった。突然、体育館の扉が勢い良く開いた…。

そこに立っていたのは…まぎれもなく

私の父親だった。

「ちょっと待った～！！！！」

と言いながらズカズカと式場に入ってくる。当然、辺りはザワザワし始めた。

そして、何事もなかったかのように壇上にあがりマイクを握った。

「えーっと。みなさん、卒業おめでとう。私は江ノ原グループ社長の江ノ原八雲と言う。

3年の中にいる九条美幸こと江ノ原美幸の父親だ。」

そう言いながら、私の方を見た。もちろん周りにはいる人達が私に視線を向けたのは言うまでもない。

「美幸、オマエはオマエの好きなことをすればいい。私はもう何も言わないよ。

すべてを聞いた。だから、あの賭けは無効にしようじゃないか」

「え・・・？どういうこと？」

賭けは無効。その前に、誰に何を聞いたというのだろうか？

驚いている私の表情を確認したと思ったら、彼は先生達が座っているところを睨みつけた。

そう、あの先生を…。

「松葉先生とやら…うちの娘をかわいがってくれたそうで。そのお礼とってはなんですが

先程、教育委員会の方へあなたの解雇をお願いするように言っておきました」

「「「なっ！！」」」

「江ノ原と倉嶺を敵に廻すからこうなるんですよ？」

うちだけじゃない？倉嶺って…どういうことだろう？？私の頭の中もパニックになりそうだったけれど

それよりも、会場全体の方が一体何が起きているのかわからない状態だった。

父親である八雲はとても満足そうな表情をしているのが、ここからでも十分わかる。  
私に向かってピースしようとした瞬間だった。どこからかスリッパが飛んできて直撃した。

ばこーん。

「痛っ！！秘書のくせに生意気なっ！！！」  
「生意気で結構ですっ！！次の予定のことを考えて下さい。いい加減行きますよ？」  
「もうちょっといいじゃん」  
「ダメです。無理言って先方を待たせているのですから！！！」  
怒鳴り声が会場内に響く。しゅしゅ父親は、壇上から降りて秘書につかまれながら会場を後にした。  
一体なにが起こったのだろうか？というぐらい、静まり返った会場はしばらくの間その状態が続いた。

卒業式が終わり、グラウンドで写真をとったり話をしたりしていた。  
友達から、あの噂本当だったんだねと笑いながら言われたりしてなんだか打ち解けた気がした。  
そろそろ帰ろうかなあと思ったときに、ふと彼のことが頭をよぎった。  
月瀬である。このまま何も言わず、彼と別れてしまうのもどうかと思ったからだった。  
キョロキョロと彼を捜してみるけれど、見当たらなかった…。  
「あ、麻里！月瀬みなかった？」  
「月瀬？んー…あ、さっき靴箱の方にいったのみたよ？」  
「そう。ありがと」

靴箱の方へと足を急がせた。  
すると、そこには月瀬はいなくて靴だけが残っていた。  
どこにいるかはわからないけれど、校舎内に入ったことは確かだと思い校舎内へと入っていった。  
教室、屋上、いろんなところを回ってみたけれど彼の姿はどこにも見当たらなかった。  
一体どこに…と結局振り出しに戻って靴箱のところに来ていた。  
「はぁーどこいったのお…」  
そう、一言ボソッとつぶやいた後ろで声がした。  
「何やってんだ？九条」  
「うわわわっ！！な、月瀬！いるならいるって返事しなさいよ！！！」  
「わりい…ってオレ捜してたの？」  
「あ、えっと…ごめん。なんか迷惑かけちゃったみたい」  
彼の顔が真っ直ぐ見れない。下を向いたまま彼に謝った。  
しばらく、返事がなかったけれど頭の上に何かが触れたのを感じた。それは月瀬の手だった。  
「そんなことない。ま、これで会うことはぐっと減るな…体に気つけて…じゃ」  
そう言って、私の前から立ち去って行ってしまった。

言いたい事はもっとあったのに…

聞きたいこともたくさんあったのに…

もう、会えないだなんて…。

## 最後の我儘

---

卒業後の進路は専門学校へ進学。

今まで名乗っていた「九条」を捨てることを決心したのはいいんだけど、やはり

「江ノ原」という名字は、みんなから避けられてしまう。

それがわかって、今まで名乗らなかったわけだけど。こうも避けられてしまうとどうしようもない。

よって3ヶ月で学校を中退。

今は、父親の後ろについて会社経営のノウハウを学んでいるつもり。

「あ——つ——い——！！」

「…情けない。まだピチピチの若者じゃないか！！」

「ピチピチって…はあ——暑いっ！！もおー限界っ！！」

家に帰る途中の車の中での会話。今日は、大手との会食だったんだけど…。

相手の社長がしゃべるしゃべる…しかもくだらない話ばかりで退屈だったんだよ。

つまらなさそうに、窓の外の風景を眺めていると隣に座っていた父親が話し掛けてきた。

「そうだ。賭けに負けたんだよね？美幸は…わしの言うことを一つ聞いてもらおうか？」

「言うこと？…負けたのは認めるけど、卒業式の時は好きにしろっていったじゃん」

「うっ…一つだけでいいじゃ。どうだ？」

一つだけというのがひっかかる。何を企んでいるのだろうか？ニッと笑顔になったと思ったら

父親の口からこんな言葉が出てきた。

「お見合いをしろ」

「え？えええええ！！！！お、お見合いいい？？？」

そんなの聞いてないっ！あ、今聞いたばかりか…お見合って気がのらないんだけど。

第一恋愛とかする気分じゃない…まだ…ね。

「会うだけ会ってみればいいんだよ」

そう何度も言うので、とりあえず顔を見る程度にあうことにした…秘書の言葉もひっかかるけど。

「逆らうと、何がおこるかわかりませんよ？」

—お見合い当日。

相手は大手車メーカーの御曹司らしい…顔は…普通？

お金はあるだろうけど、そんなのははっきりいってどうでもいい。

親同士で話しがどんどん膨らんでいく。私たちはお飾りみたいな存在と化していた。

「美幸、彼に聞きたいことはないのかね？」

「え……」

突然話をふられても困る。聞きたいこと…そんなのこっちが聞きたいよ…。

咄嗟に頭のなかに浮かんだ言葉をそのまま声に出してしまった。

「忘れられない人がいてもいいですか？」

「「「え……？」」」

いけないことを言ったんだと、気付いたのはそれから数秒後のこと。

「あ。。。す、すみません…忘れて下さい…はい」

「あ、はははは。かまわないよ、そろそろ料理が来る頃だ。食べて落ち着こうじゃないか」

相手の親がそう言って、なんとか場の雰囲気は和んだかのように見えた。

このお見合い相手と付き合うというのは簡単だと思う。でも、ココロの底から好きになる自信がない。

さよならを言えなかった彼が…忘れられないから。

「お料理の方、お持ちしました」

「入りたまえ」

「はい」

料理が運ばれてきた。各自の前にお膳に盛られた料理が置かれる。

ふっと、顔を料理の方から配膳している人物へと視線を移した。

その人物の顔を見て驚いた…なんで、ここにいるのだろうか？？？

「月瀬……？」

そう、思わず名前を言わずにはいられなかった。

「…九条、ひさしぶりだな」

「な、なんでここに？」

驚いている私を見て、隣に座っていた父親がゆっくりと口を開き話はじめた。

「この料亭は倉嶺グループのものだからな。息子がいておかしいことはないだろう？」

「…最初からわかっててここを指定したの？なにそれ…秘書も知ってたの??」

「もちろん、美幸さん」

まんまとはめられたってわけか…自分で自分を笑ってしまう。

それを見ていた相手の家族の人は、何が起きているのか理解できていなかった。

「ど、どういうことでしょうか??」

「んー…どういうことか美幸、説明してあげなさい」

そう、話をふられたのと同時に席を立った。そして月瀬の腕を引っ張って部屋から出ようとした。

「ごめんなさい。私は、やっぱり…お嬢様なんて柄じゃないのよ」

「ふふ…だな。オレも御曹司とかそういうキャラじゃないんだよね」

お互いにお互いの顔を見合わせて、部屋を後にした。

「どういうことですか!!八雲社長!!!責任問題ですぞ?」

「んーうちと倉嶺が手を結ぶだけじゃん…それを敵にするつもりですか??」

それからは、みんなが想像している通りだった。

倉嶺と江ノ原は提携を結び、国内最大級の会社へとなった。

あとで、秘書から聞いた話だったんだけど父親の八雲と倉嶺の社長である倉嶺玲は幼馴染だったそう。

私のあの賭けの話も二人の間で、話してて思いついたものらしい…。

つまりは…二人の掌で踊らされていたってわけ。

まったく…。

そんな私は、桜さんとすっかり仲良しになっていて彼女の仕事の手伝いなんぞをしている。

その傍らだけど花嫁修業もしていたりして…。

まだまだ先の話だろうけれど、いつかきっと現実となるものだから。

もう、道は迷わないと決めた。

そうこの道を進むと…。